

「近代茨城」の礎をつくった男

今日の茨城の社会インフラの骨格をつくった人物は誰であろうか。政治、経済、社会、教育、文化の各分野で現代に残る実績を残した偉人、言うなれば、「近代茨城の父」といえるような人物は誰であろうか。

議会制民主主義の根幹である国会の開設要求運動が全国で広がった明治初期。本県でも自由民権運動に関わっていた有志により、筑波山で「国会開設請願の大会」（筑波山の会）が開かれた。明治13年(1880)のことである。

その会の中に、後に茨城の政治、経済、社会、教育、文化の各分野で大きな足跡を残した人物がいた。名を飯村丈三郎(1853-1927)（以下飯村と略）という。真壁郡黒駒村(現下妻市黒駒)の豪農の家の出身。幼いころ寺に預けられ、住職の薫陶を受ける。

若くして黒駒村の戸長(村長職)となった飯村は、同志と共に政治結社「同舟社」を組織。茨城県下の自由民権運動の同志と共に開いた「筑波山の会」では中心的役割を果たした。

明治14年(1881)、茨城県議会議員となった飯村は、当時、経営難に陥っていた第六十二国立銀行(後に常磐銀行と改称)の再建を県令(知事)から頼まれ、立て直しに成功。その後、同行頭取に就任。銀行存続に実績を残した。

また、飯村は、水戸一小山間の線路建設を目的に明治20年(1887)、水戸鐵道(株)が設立されると、取締役として経営に参画。鉄道敷設に尽力した。

さらに、実業家としての飯村の本領は、新聞事業でいかんなく発揮された。自由民権運動の同志、関戸覚蔵によって明治24年(1891)に創刊された「いはらき新聞」(現茨城新聞)は、19号以降、経営難から発刊できない状態に。

関戸は盟友の飯村に救いを求めたが、飯村は頑として首を縦に振らなかった。新聞経営の難しさを知っていたからである。しかし、再三にわたる要請に折れ、いはらき新聞社(現(株)茨城新聞社)の経営を引き継ぎ、社長に就任した。

当時、飯村は衆議院議員で東京に在住。新

飯村丈三郎

Jimura jozaburo

聞社の実務は江戸周に任せ、自らは「いはらき新聞」の支援者となる人脈づくりに奔走。大正7年(1918)の「水戸の大火」で新聞社が焼失した際も、毎日発刊し続けた。これが読者の信頼を強固なものにした。

大正12年(1923)、関東大震災に遭遇した飯村は水戸に移住。その後、昭和2年(1927)、私財を投じて財団法人茨城中学校(現茨城高等学校、茨城中学校)を設立、自ら校主となった。

70歳を超えてもなお飯村を突き動かしたものは何か。生誕地の下妻市教育委員会が発刊した生誕150年記念誌には、「私がこの学校を設立したのは報恩感謝の念をもってつくったのであります」と記されている。

報恩感謝。飯村が幼い頃に教わった教えであり、自らの信条としていた「衆生の恩」に報いる感謝の言葉である。

飯村は子どもの頃に預けられた黒子村(現筑西市黒子)の千妙寺の住職亮天僧正から、「恩を知れ」と教えられた。中でも、社会の恩である「衆生の恩」が一番大事と諭された。

「衆生の方から直接受けた恩は、衆生に向かって報いなければならない」。飯村が関わってきた

国会開設運動、銀行再建、水戸線開業、新聞社復興、学校建設。それらは奇しくも近代茨城の基礎を築く事業となり、今に生きている。(文中敬称略)

主な参考文献

『下妻市史 下』(平成7年、下妻市発行)。『報恩感謝の精神～飯村丈三郎生誕150年記念誌～』(平成16年、下妻市教育委員会発行)。『下妻ゆかりの政治家・実業家・教育者飯村丈三郎』(平成26年、下妻市教育委員会発行)。『茨城新聞百年史』(平成4年、茨城新聞社発行)等。



飯村丈三郎翁の生家(下妻市黒駒)(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長  
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「報恩感謝」